

越後佐渡おもむく歴史ばなし

「人間一生中に見ること難き」日食を見た！
—明治の皆既日食—

明治20年（1887）8月19日、新潟県、福島県、北関東において皆既日食が観測されました。日食とは、月が太陽と地球との間にきて太陽光線を遮る現象のことです。その中でも、太陽面が月面により全部おおわれることを皆既日食といいます。この日に皆既日食が起こることは何週間も前から新聞で取り上げられ、政府は官報に各地の観測情報を報告するように発表し、一般市民にも、日食観測を行うように奨励しました。新潟測候所は、南蒲原郡東大崎村（現三条市）にある永明寺山の山頂に観測台を設置し、日食の観測にあたりました（※1）。また県内各地でも観測され、その様子は連日新聞に掲載され、人々の関心を引きました。

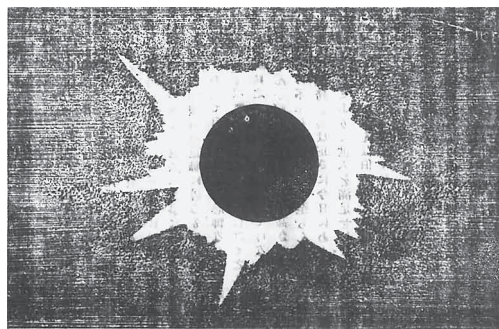
大崎村での日食観測は、天候が危ぶまれながらも成功しました。専門家による観測で成功したのは永明寺山だけで、この時、日本で初めて皆既日食中のコロナ（※2）の写真が撮影されました。観測して描かれた日食皆既図は内務省に提出され、また全国各地から皆既日食の観測図が集められました。現在、国立天文台三鷹図書室が所蔵しています。

大崎村に近い粟生津村（現燕市）にあった長善館（※3）の鈴木惕軒の日記には、「十九日曇、（中略）午后二時日食始、四時皆既」とあります。粟生津村でもしっかりと観測できたようです。さらに、惕軒の息子の鹿之助の日記にはより克明に当日の様子が書かれています。それによると、19日は前夜からの激しい雨で、庭が池のようになるほどで、「人間一生中に見ること難き日食既の日なるに此までは二十六七日も照続きながら」今日雨であるのは不幸の日だ、と嘆いています。ところが12時頃になって雨が止み、光が差しはじめます。大喜びの鹿之助は、病をおして庭に観測のための道具と椅子を準備します。いよいよ日食が始まり図を描き始めますが、上手く描けずにいる間に雲がかかり、上の方は描き写せませんでした。そのことを嘆きながらも楽しんでる様子が日記の記述から伝わってきます。

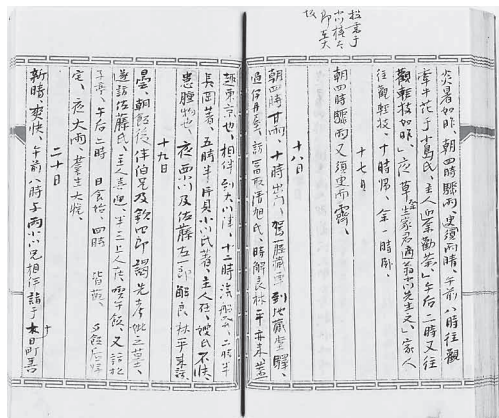
長善館で教員を務めていた鹿之助は、実はこの年6月に突然体調を崩し、7月には授業も行えず、夏季休業に入っても体調は悪化する一方でした。そして療養の甲斐もなく10月2日に亡くなってしまいます。そのような中で、この日は、幾条の光輝を放つコロナや暗闇の中の星を見ることができ、心躍る出来事だったのではないのでしょうか。

日本で次に皆既日食が観測できるのは、2035年になります。

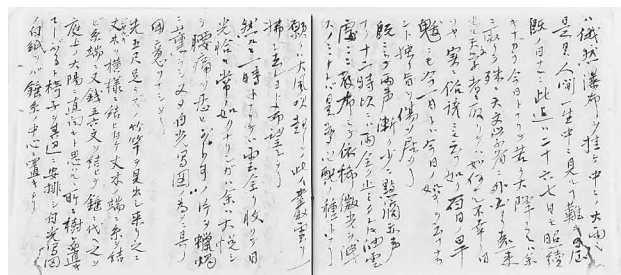
- ※1 観測台があった場所は、現在大崎山公園となっていて、日食観測の記念碑が建てられています。
- ※2 皆既日食の際、青白く冠状に光って見える太陽の周囲を取り巻く薄いガス。
- ※3 長善館は、天保4年（1833）、蒲原郡粟生津村に鈴木惕軒が開設した私塾で、多くの学者や勤王家、医師、政治家などを輩出し、明治44年（1911）まで存立しました。鈴木惕軒は二代目館主、鹿之助は惕軒の子で、柿園と号しました。



（「新潟新聞に掲載された測候所において写された観測図」【新潟新聞 明治20年8月20日】）



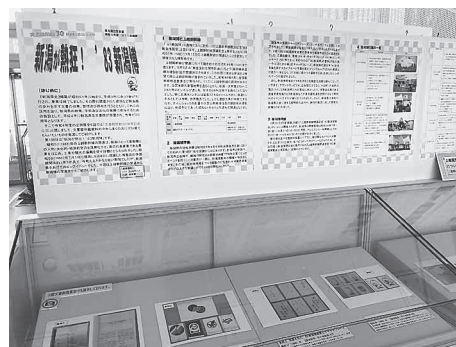
（「鈴木惕軒の日記」【惕軒日記（第19号）】
E9306-319）



（「鈴木鹿之助の日記」【日録8号】E9306-483）

令和4年度企画展 紹介

2階の閲覧室及び1階のエントランスホールでは、約2か月ごとにテーマを決めて所蔵資料を紹介する企画展を行っています。今年度は「文書館開館30周年記念企画」と銘打って、文書館所蔵資料の中から多くの方にぜひ見てもらいたいものを厳選して紹介しています。



第1回企画展
1階エントランスホール

○第1回 「新潟が熱狂！'83新潟博」

〔5月3日（火）から7月10日（日）まで〕

新潟にとって工業や観光の振興を促す好機ととらえられた昭和57（1982）年の上越新幹線の開通と新潟県をあげてのビッグイベントであった'83新潟博の様子を紹介しました。

○第2回 「新潟県鉄道史」

〔7月12日（火）から9月25日（日）まで〕

明治19（1886）年の直江津（現上越市）―関山（現妙高市）間の開通に始まる新潟県の鉄道の歴史を、廃線となった路線を含め紹介しました。

○第3回 「新潟県立文書館開館30年のあゆみ」

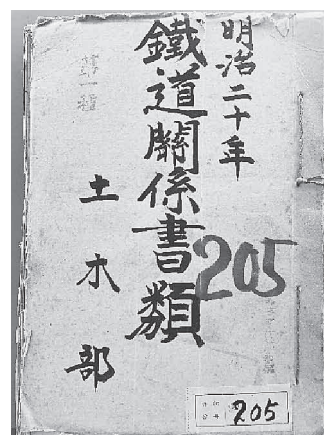
〔9月27日（火）から12月25日（日）まで（特別企画展開催期間中）
の10月25日（火）～11月13日（日）は除く〕

令和4年8月7日で開館満30年を迎えた新潟県立文書館の開館までのあゆみを振り返ります。

※12月以降も様々なテーマを設定しながら資料を紹介していく予定です。

○第4回 〔12月27日（火）から3月5日（日）まで〕

○第5回 〔3月7日（火）から5月7日（日）まで〕



〔第2回企画展 展示資料〕
明治23年 上越鉄道会社
創設再願書（明治20年「鉄
道関係書類」）（請求記号：
H97―土監―135）

◆令和4年度特別企画展

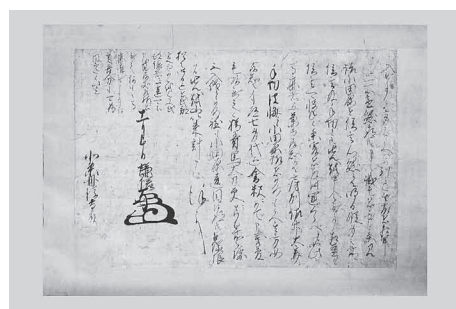
あなたの知らない文書館の世界

―開館30年の歴史とイチオシ資料― 開催案内

新潟県立文書館は今年開館30年を迎えました。当館には毎年県内各地から新潟県に関する様々な資料が寄贈・寄託され、研究・調査のため多くの方に利用されていることをご存じでしょうか。そこで今年度の特別企画展では当館職員が厳選した、普段滅多にお目にかかれない資料や、展示する機会はないけれども是非とも見ていただきたい資料を多数展示します。この特別な機会にまだ当館を訪れたことのない方も文書館の魅力を思う存分体験してみてください。

日時：令和4年10月25日（火）～11月13日（日）

9時30分～17時



〔展示資料〕謙信書状
（請求記号：E9130-2）

連動して**特別企画展連動体験型企画**を開催します。

日時：11月2日（水）、11月9日（水） 13時30分～15時00分

※両日ともに同じ内容、要事前申込

特別企画展をより楽しんでいただくため、次の内容を予定しております。

◆文書館30年の歩み〔講義〕

◆書庫等バックヤードツアー・文書整理体験〔体験〕

令和3年度に閲覧可能になった受贈・受託文書

新たに閲覧可能となった受贈・受託文書を紹介します。

請求番号	文 書 名	備 考
E0305	新潟県地下資源開発関係文書等	寄贈者が新潟県職員として在職した昭和 20 年代から 40 年代を中心とする新潟県内の地下資源（天然ガス・石油等）開発調査関係資料をはじめ、地盤沈下、地すべり、地震に伴う地殻変動に関する資料など多数収録。ほかに、大正・昭和期の教科書類もある。
E2102	矢川掘割一件願書上郷村之議定書写	江戸時代後期に矢川（現在の弥彦村～新潟市西蒲区を流れる川）流域の村々が立てた矢川流路変更計画に関係する文書や、周辺の村々で起こった争論に関する文書などの写しが 1 冊の和本にまとめられている。
F86	中頸城郡梶村大瀧家文書（一部）	大瀧家は代々梶村（上越市吉川区梶）の庄屋役・年番及び梶村組の大肝煎を世襲して、地域の発展に貢献してきた。近代には実業家・政治家として活躍した大瀧伝十郎を輩出。1 万 5 千点以上の膨大な資料から、近世から近代に及ぶ中頸城郡北部地域の歴史が分かる。

令和3年度に閲覧可能になった特定歴史公文書

新たに閲覧可能になった特定歴史公文書の一部を紹介します。特定歴史公文書とは、新潟県で作成された文書のうち、保存年限が満了したもので、歴史的に重要な情報が記録されているとして文書館へ移管された文書です。

請求番号	文 書 名	備 考
J21 総市町村 1 ～ 56	一部事務組合の規約変更、解散に関する文書	総務管理部地方課作成 作成年：昭和 50 年代～平成元年 巻町・岩室村葬祭施設組合、加治川水防事務組合、十日町地方伝染病舎組合、東頸西部葬祭施設事務組合の解散など
J21 県環対 1 ～ 53	新潟県内各地の地下水位、地盤沈下観測記録	県民生活・環境部公害対策課作成 作成年：昭和 40 年代～ 60 年代
J21 土道建 2 ～ 36 ほか	長岡市大手大橋建設関係文書等	土木部道路建設課作成 作成年：昭和 51 年～ 57 年 橋梁（大手大橋）架換設計委託報告書、国架 16 橋梁（大手大橋）上部工桁製作工事完成図書、一般国道 351 号線大手大橋専用協議申請書など
J21 土都政 1 ～ 9	都市計画公園・道路の変更	土木部都市局都市政策課作成 作成年：昭和 34 年～平成元年 都市計画公園（長岡市）、都市計画道路（柏崎市・新潟市・湯沢町）
J21 土都下 1 ～ 7	都市計画下水道の変更	土木部都市局下水道課作成 作成年：平成 2 年 塩沢町・五泉市・新潟市・弥彦村・六日町・中之島町・越路町

「高校・大学における文書館資料の活用」

元高校教員・大学非常勤講師 竹田和夫

平成28年に開催された全国公文書館長会議で「公文書館の利用普及」の考え方が示され、教育との連携に関する事項もあげられた。児童、生徒、学生が自ら考え判断する思考や政策を検証する能力と主権者教育の場として公文書館利用が推奨された。文書使用前提の学習プログラム開発の必要性も示された。

翌年には高等学校の新学習指導要領が告示された。新科目歴史総合及び日本史探究の解説では資料活用の技能の習得、資料を活用して生徒が問いを表現したり現代的な諸課題との関係を考察したりする学習が強調される。そこに「博物館、図書館、公文書館や資料館との連携」が明記されるようになった。公文書館が新規に記載された意義は大きい。指導要領改訂を担当した藤野敦は「新学習指導要領における公文書館等との連携について」（『国立公文書館アーカイブズ』第72号、令和元年）でその趣旨を詳細に述べている

新課程の教科書・図説を見ると前述した動向が広く浸透しはじめている。中学社会科では震災と資料救済がテーマ学習として設定された。高校歴史総合では「資料を読み問いをたてる」形式の教科書や図説が多い。また他県の文書館の中には福井県のように新課程対応のモデル指導案も付す学習プログラムを示すところも増えてきた。

新しい教育の動きの中で新潟県立文書館の資料をどう教育現場で活用すべきか、教育関係者も義務的にとらえるのではなく、教科に加えて教育活動全般での県立図書館・文書館双方との連携、所蔵資料活用はどうアイデアを出すか、柔軟な発想でのごみたい。本稿はその試行実践をまとめたものである。

初めに高校での実践をのべてみよう。まず歴史科目の実践である。現行の日本史B・世界史Bの時間で新課程の日本史探究・世界史探究の試行授業を実施し、文書館資料を使用した。広い特別教室を会場にし、県立文書館・図書館・博物館展示スペースを設営した。用意した各館所蔵資料の複製を用意し、

手にとって観察できるようにした。コロナ下で活動が制限されていた頃であったので生徒たちは教室内であるにせよ、校外学習を疑似体験しながら各施設の展示をグループ単位で巡検した。展示観察用紙を持ち、展示物（複製資料）の特徴をメモし、自席に戻ってからの課題探究に備えたのであった。

文書館所蔵資料から毎日新聞戦時版・新潟新聞という全国と地域の新聞資料、昭和16・17年発行「写真週報」を活用した。さらに私が横浜開港資料館で複写した欧米の新聞記事も対比するように置いた。記事本文は難解でも見出しや写真だけでも生徒たちは十分に本質をつかむことができたのである。

日本史探究授業では新指導要領解説の「近現代の地域・日本と世界の画期と構造」を意識し、諸資料を活用し生徒が立てた仮説（「国際情勢を正確に把握できていれば終戦の交渉も可能だったのではないか」）をふまえ、課題を追究し第二次世界大戦前後の国際社会における日本の役割について、多面的に考察した。以下生徒自らが発出した問いかけを掲げたい。

メインエスチョン「日本は第二次世界大戦にどのようなかかわっていたのか？」サブクエスチョン1「ポツダム宣言に対する日本の反応とそれへの連合国の姿勢はどのようなものであったのか。」サブクエスチョン2「終戦時の国内の各立場の認識について考えよう。当時の新潟県民の立場になってみよう。」生徒は当時の県民の立場を意識して前述した文書館所蔵の新聞と外国の新聞を比較することにより、当時の日本国民と外国との間の情報力の差に気づいていった。戦争継続か終戦交渉かという議論が識者の間でも一般国民の間でも割れた事実を自分たちで明らかにしていく。もし当時新潟の高校生であったならば、すべてが規制された中でもできる範囲での終戦にむけてのささやかな意思表示「つぶやき」を広げたいと生徒自身がしめくくった。地域の新聞という身近な文書館資料が生徒に戦時中の事象にリアリティを感じさせたのである。

世界史探究の試行授業では新指導要領解説の「第二次世界大戦と地域の変容」に沿って、主題を設定し日本史同様に複数の国の新聞資料を比較し連合国の構想、アジア諸国の地域的な特徴を多面的・多角的に考察した。生徒自身による「問い」の発出は英字新聞に関心を抱いた英語部の生徒が発案した。

前記2種類の授業は勤務高校の教員が教科をこえて多数参観した。英語の教科書掲載のオバマの核兵器根絶の演説を引用したこともあり英語の教員が関心を寄せた。生徒は自分で「史資料読解学びのカルテ」を記していったのでこの作業を見学する教員もあいついだ。なぜならば本年から高校に導入された観点別評価は学校内部もまだ固まっているとはいえない。授業では生徒が自身や他者の評価を毎時つけていく。特に教員もその基準設定に悩む「主体的に学習に取り組む態度」も生徒が目標設定したのである。史資料読解に特化した自己評価の例は他県にもない。素材は文書館資料であることを強調したい。

日本史の授業を参観した千葉県立長生高校佐藤克彦教諭は「翻刻資料の横書き・現代語訳に賛同する。原資料にあたり、写真版でも史料に触れる機会を大事にしていきたい。生徒に司会役を任せ、クラスで授業をつくることを大事にしている。歴史を好きになってもらい、自身のこととしてとらえるためには、授業での自己肯定感の高まりが必要不可欠であると痛感した。」と感想を寄せてくれた。

教科以外の教育活動では総合的な探究の時間・スーパーサイエンスハイスクール等学校指定事業、等に文書館の有する情報を活用した。これらの教育事業には地域協働・地域学重視の傾向が共通している。地域の情報を各種有する文書館は格好の学びの場となりうるのである。従来の文書館＝地域史の専門施設というイメージから、新しい活用の可能性が付加された県立文化施設として期待されつつある。

次に大学の活用実践を紹介したい。私は高校教員と並行して22年間大学非常勤講師をつとめてきた。

講義「地域から文化を考える」では「感染症の民俗文化」を取り上げた。その際県立文書館のインターネット古文書講座第26回「疱瘡見舞い」の古文書を示し、学部横断・文理融合の観点で検討した。

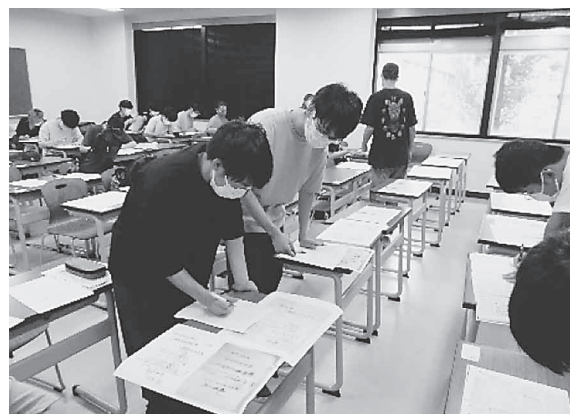
「社会科・地理歴史科教育法」講義では最近学生が取り組んだのは歴史総合の授業指導案をどう作る

か、地域資料をどう活用するかを課題とした。

歴史総合の指導要領で示された大項目「歴史の中項目歴史の特質と資料」を意識し、文書館所蔵の佐渡市の壬申地券・柏崎市の改正地券、国文学研究資料館所蔵の新潟の地券の各複製を並べて仮設した展示スペースに置いた。コロナ下なのでグループではなく個人の作業とし、認識の共有と意見の重ね書きをする「展示観察リレーワーク用紙」を作成し、学生はこれを片手に文言・書体・押印の特徴を確認し、地券の資料批判を行い、指導案を作成した。

大学生が歴史総合でもう1つ取り組んだのが指導要領の中項目「国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題」での地域資料の教材化である。「日本の大正期の民衆運動は大衆化の動きとなりうるか」という昨年の受講生が発案した問いかけの解決を生徒の立場にたって試みたのである。素材は県立文書館所蔵の大正期の新聞資料である。グローバル視点の位置づけにつなげることができた。

以上高校・大学での活用実践を示してきたが、今後新しい教育のうねりの中で文書館に求める期待はさらに大きくなるであろう。将来に向けて活用学習プログラムの充実をお願いしたい。



文書館所蔵資料複製の資料批判を行う大学生

..... 令和4年度 10月以降の主催講座一覧

○古文書講座

講座名	日程	会場	定員	申込開始日
はじめての古文書講座（秋季）	11/16（水）・ 24（木）・30（水）	大研修室	15名 （予定）	10/14（金）
古文書初級解説講座（冬季）	A：12/7・14（水） B：12/9・16（金）	大研修室	各45名 （予定）	各コースとも 11/4（金）
古文書解説講座（冬季）	1/25・2/1（水）	大研修室	45名 （予定）	12/23（金）

※時間はすべて13：30～15：30の2時間です。 ※テキスト代として100円が必要です。
 ※「はじめての古文書講座（秋季）」の日程・会場については、年度当初のご案内から変更があります。
 ※古文書初級解説講座（冬季）については、A・Bコースともに同一内容です。
 ※各講座の定員は新型コロナウイルスの感染状況により変更する可能性があります。

○「新潟県の歴史」講座

歴史講座	講座回	日程	会場	定員	申込開始日
	第2回	3/4（土）	ホール	95名（予定）	2/3（金）

※講師は県内外の歴史研究者を予定しています。 ※時間は13：30～15：30の2時間です。
 ※定員は新型コロナウイルスの感染状況により変更する可能性があります。

○特別企画展連動体験型企画

コース	日程	会場	定員	申込開始日
Aコース	11/2（水）	大研修室	30名（予定）	各コースとも 9/30（金）
Bコース	11/9（水）	大研修室	30名（予定）	

※特別企画展と連動して、文書館バックヤードツアーや文書整理体験等を予定しています。
 ※日程・内容は年度当初のご案内から変更があります。
 ※A・Bコースともに同一内容です。 ※時間はいずれも13：30～15：00の1時間30分です。
 ※定員は新型コロナウイルスの感染状況により変更する可能性があります。

アーキビスト 文書館職員随想

当館では例年「資料所在確認調査」を行い、県史編纂事業において利用した資料を中心として現況の確認や文書保存に対する理解の促進を図っている。30年前の開館当初から現在まで、唯一継続して文書調査員としてこの活動をご指導いただいた伊藤雅一氏が今春退任された。当館は新潟県の歴史センターとしての役割を果たすべく日々の業務にあたってきたが、設立されるきっかけとなった新潟県史編纂事業から今日まで多くの人々の支えによって、曲がりなりにも30周年を迎えることができた。伊藤先生はじめ、多くの皆様に感謝申しあげたい。

さて、今後の文書館のあり方について、先人の築き上げた業績を土台として業務を行っていくことは当然であるが、年月を経てかわっていくことがあるのも世の常である。まず、今回の便りは今まで作成してきた定型の記事に加えて特別寄稿を掲載し、文

書館と学校教育連携の取組事例を取り上げ、便りの紙面改変に取り組んだ。また、学校との連携を強化するなど、より多くの皆様に当館の存在の理解を広げるコンテンツも充実させたい。文書館の基本は、変わらぬもの（文書）を大切にしていけることである。しかし一方で新たな取組に踏み出す勇気も持ち合わせなければならないと考えている。

（目黒記）

編集・発行 新潟県立文書館

〒950-8602 新潟市中央区女池南3丁目1番2号
 TEL 025-284-6011 FAX 025-284-8737
 URL https://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/?page_id=569
 E-mail archives@mail.pref-lib.niigata.niigata.jp